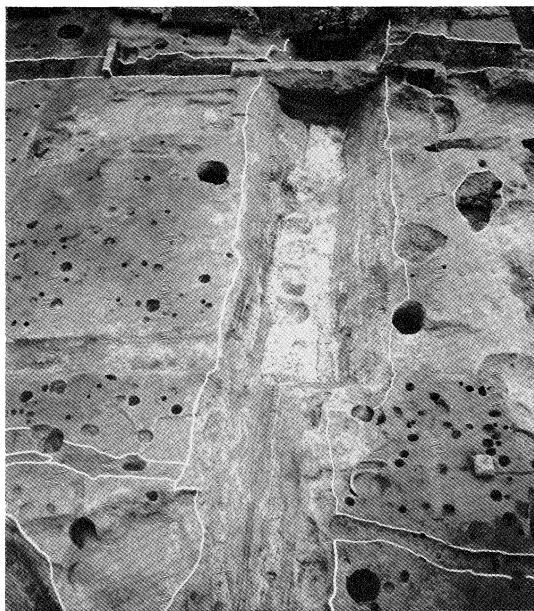
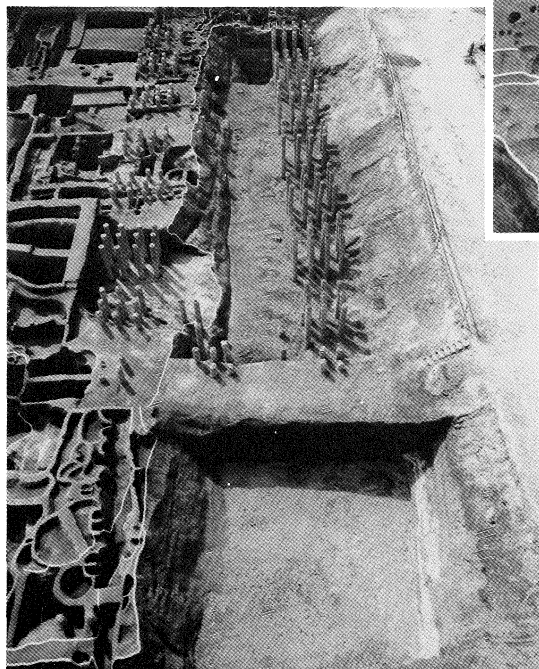


埋蔵文化財 愛知

No. 25

平成2年度 S D 501 (大溝 A) 東から ↓



↑ 昭和63年度 F 区 S D 01 (大溝 B) 西から

那古野城の頃の堀

名古屋市中区三の丸

名古屋城は、近世の代表的な城郭建築の1つである。しかし、現在、官庁街となっている三の丸地区が、かつて武家屋敷の建ち並ぶ城の一郭であったことはあまり知られていない。まして、その下にもう1つ“城”が埋もれていることなど知る由もなかった。昨年10月から名古屋家庭・簡易裁判所建設予定地において実施した調査では、昭和63年の調査同様、この“2つの城”の一端を窺う数々の成果を得ることができた。

平成3年度事業計画

(財)愛知県埋蔵文化財センター

●埋蔵文化財発掘調査及び報告書の刊行

- 名古屋環状2号線関係 1,735m²
 - 1. 松河戸遺跡 (春日井市)
- 国道23号線バイパス関係 11,300m²
 - 2. 岡島遺跡 3. 室遺跡 (西尾市)
- 国道23号線関係 400m²
 - 4. 不馬入遺跡 (幸田町)
- 県道新川清洲線関係 847m²
 - 5. 清洲城下町遺跡 (清洲町)
- 県道馬飼井堀線関係 2,560m²
 - 6. 跡ノ口遺跡 (稲沢市)
- 県道名古屋祖父江線関係 5,600m²
 - 7. 堀之内花ノ木遺跡 (稲沢市)
- 県道安城碧南線関係 1,200m²
 - 8. 東端城遺跡 (安城市)
- 県道加納東保見線関係 1,750m²
 - 9. 伊保遺跡 (豊田市)
- 県道島崎豊田線関係 366m²
 - 10. 坂口遺跡 (旭町)
- 県道新川甚目寺線関係 1,890m²
 - 11. 外町遺跡 (清洲町)
- 五条川改修関係 4,820m²
 - 12. 清洲城下町遺跡 (清洲町)
- 尾張看護専門学校増築関係 1,300m²
 - 13. 山中遺跡 (一宮市)
- 県警総合科学センター建設 3,600m²
 - 14. 名古屋城三の丸遺跡 (名古屋市)
- 東海北陸自動車道関係 11,960m²
 - 15. 田所遺跡 16. 西上免遺跡
 - 17. 田所A遺跡他 (一宮市・尾西市)
- 報告書の刊行
 - 清洲城下町遺跡(名古屋環状2号線関係)
 - 朝日西遺跡(名古屋環状2号線関係)
 - 勝川遺跡(名古屋環状2号線関係)
 - 朝日遺跡(名古屋環状2号線関係)
 - 名古屋城三の丸遺跡(名古屋家裁関係)
 - 岩倉城遺跡(県道萩原多気線関係)
 - 上万場遺跡(県道瑞浪大野瀬線関係)
 - 山中遺跡(尾張病院改築関係)

- 松久保遺跡(老人ホーム建設関係)
- 吉田城遺跡(豊橋警察署改築関係)
- 小田妻古窯跡群(水野土地区画関係)
- 勝川遺跡(勝川土地区画関係)

●発掘調査技術等研修会の開催

- 基礎研修会 2日間 募集人数 30名
平成3年8月22・23日
- 専門研修会 2日間 募集人数 40名
平成3年11月28・29日

●広報紙誌の発行

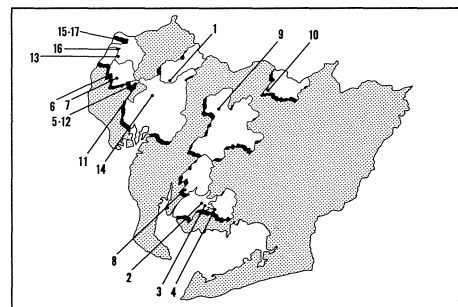
- 『愛知県埋蔵文化財情報7』の発行 年1回
- 『埋蔵文化財愛知No25～28』の発行 年4回

●埋蔵文化財展の開催

- 第1会場 西尾市資料館
7月27日(土)～8月4日(日)
- 第2会場 愛知県埋蔵文化財調査センター
8月12日(月)～8月25日(日)

●埋蔵文化財講演会の開催

- 第1会場
西尾市文化会館 小ホール
8月3日(土)午後1時30分より
講師 白石太一郎先生
(国立歴史民俗博物館教授)
- 第2会場
弥富町総合社会教育センター ホール
8月25日(日)午後1時30分より
講師 金関 恕先生
(大阪府立弥生文化博物館長)



遺跡の位置

愛知県教育委員会実施の調査事業

愛知県教育委員会文化財課

県教育委員会は、遺跡の周知徹底をはかり、様々な開発事業との調整・協議のための基礎的資料の作成を、市町村教育委員会の協力をえてすすめてきたが、本年度も次に掲げる調査を実施していく。

(1) 中世城館跡調査事業

文化財課では、昭和54年度に市町村教育委員会の協力のもとに県下の城郭遺跡の現況概要を調査し、823ヵ所（西三河地区301ヵ所）の城館跡を確認している。それらは、山間部・丘陵部・平地部に立地し、多様な形態を示している。しかし、近年の山林の著しい荒廃や各種開発事業の進行に伴って、城館跡の現状が変容し、さらには滅失するおそれが増大しつつある。このため、城館跡の現状等を正確に把握し、その保存に努めるとともに、開発事業との調整・協議に備えるため分布調査を実施するものである。

また、県下の城館跡の多様な形態は、中世から近世初期にかけての尾張・三河の政治的あるいは軍事的情勢を反映しているものと考えられ、この視点での研究資料の蓄積を目的としている。

調査方法は、関係市町村教育委員会の協力のもとに漸次計画的に現地踏査を実施し、城館跡の現状確認、聞き取り調査及び縄張図の作成を行う。同時に、関連する文献・地誌・絵図・地籍図を検索し、必要に応じてそれらの撮影、複写を行い、調査カードを作成する。

昭和63年度から始められたこの事業は、本年度から西三河地区を調査対象として実施する。

(2) 重要遺跡指定促進調査

県内に所在する重要な遺跡については、将来にわたって保護、保存するために文化財保護法や地方公共団体の文化財保護条例等による指定保護が必要となっている。

そのためには、遺跡の範囲や内容などを明らかにして、遺跡の歴史的な位置づけを行うことが求められている。

県教育委員会では、昭和44年以降、県内の各遺跡で重要遺跡指定促進調査を実施し、数多くの遺跡が史跡として指定され、遺跡の保存活用が実現されている。

本年度は、尾張地区の古墳・古窯などを調査対象とし、確認調査を実施し、遺跡の範囲や重要度を掌握するための基礎資料の収集、整備を行う。

(3) 清洲城跡調査

昭和63年度から継続してきた本事業は、昨年度までに最も基礎的な資料となる土地利用現況について調査を終了したが、本年度は、この図面化に取り組む。これにより基礎的作業は一段落することとなる。

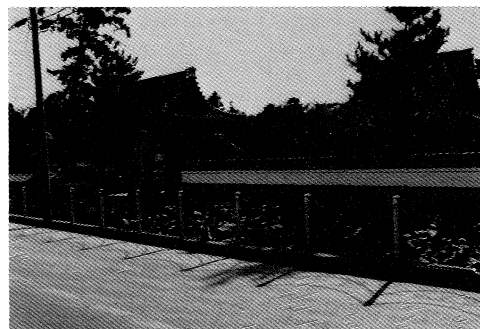
(4) 第4回埋蔵文化財調査研究会の開催

県内の埋蔵文化財の発掘担当者が、発掘調査の成果発表を通して情報交換と研鑽に努めることを目的に開催する。

平成2年度に実施された、94件の発掘調査のうち主要な山中遺跡・膳棚古墳・江古山遺跡・東古渡町遺跡・南山古窯跡・真弓山城跡・窯元A窯・名古屋城三の丸遺跡の成果発表と遺構・遺物の取り上げについての事例発表を行う。

開催日 平成3年7月5日(金)

会 場 愛知県埋蔵文化財調査センター



典型的な城郭伽藍を示す本證寺（安城市）

シリーズ 江戸時代を掘る1

近世考古学雑感

塚本学氏は、近著『都会と田舎』（平凡社）のなかで興味ある事例を紹介されている。近世前期の17世紀中葉、南信濃のとある小さな山村で殺人事件がおき、舞台となった寺の老女が城下町飯田に拘引され、20日あまりの入牢ののち、疑い晴れて帰郷した。その後老女は入牢中の衣食住を生涯の贅沢と記憶しつづけ、また自分が連れていかれたところを江戸と思い込んでいた、というのである。ここには、一山村に住む老女の目を通しての「江戸」観が飾られることなく示されているのであり、そうした都市観を支え続けたものが紛れもなく「田舎」の実生活であったということに、私は興味をひかれるのである。老女の都市観が「贅沢」という言葉で表現されていることからすれば、直接には都市のイメージは物的な財の豊かさ——大量消費と繁華——によって彩られているといっていよう。そして、このような都市観は 300年以上の時を越えて、今日、近世都市遺跡の調査にたずさわり、累々と錯綜する遺構群と厩大な出土遺物を前にした私たちの印象とも、奇しくも一致しているのである。だが、本当に私たちは老女の都市観をわがものとしているのであろうか。私たちのもつ贅沢観が、ほとんど学問的な検討を抜きにした経験的な、まさに「印象」の枠をでないものであるとするならば、そこに大きな思考の落とし穴があると危惧するのは、果たして私一人のことであろうか。老女の都市観を生みだし支えていたものを明らかにすることこそが、課題と言わねばならないであろう。

☆

近世の遺跡を調査すると、確かに大量の遺物が出土する。その九割方は焼物であり、器種、機能も多様であって、なかには、用途のわからないものや、おおよそ機能はわかっていても具体的な使われ方がわからないものなどもある。また上級武士の屋敷地などから特殊な優品が出土

する例も多い。それは、あたかも大量消費を地でいくかの観を呈している。

しかし、こうした量を規定しているのが機能や用途の多様さに基づくものなのか、それとも、特定の用途における器種の多様さ、あるいは特定器種の量そのものの多さなのかは、必ずしも明瞭ではない。一般的に出土量のもっとも多量となる18世紀末以降は、一方では焼き継ぎによる修繕が普及し、物を大切に扱っていることが目に見える形で示される時期でもあって、消費の中身や質が決して単純ではないことを教えてくれる。

老女がおそらくは直接目にすることができたであろう供膳具についていえば、城下町と宿場や農村との間で、あるいは身分や階層間においていかほどの差があったのか、あったとしてそれが量・質いづれに関わるのか。やはり不明と言わざるをえない。山村の調査事例は数少なく、老女の暮らしが見えにくいのはまだしも、城下における武士や町人の生活様式も消費と繁華としか視えてきていないとしたら、私たちはいったい何を分析し研究してきたのだろうか。

☆

近世遺跡から出土する厩大な遺物は、なにも野原の真ん中で使われ、棄てられたものではない。様々な遺構から出土するのであり、一義的にはそれらの遺構の組合せによって復元される特定の生活空間において使われていたものである。もちろん物はそれ自体で善し悪しの価値を持つ。だが、そればかりではなく、使われ方や、使われる場によっても人に与える価値観は異なってくる。老女の「贅沢」観をうみだしたものは、与えられた食物や使われた器物もさることながら、生涯にただ一度足を踏みいれた城下町飯田の景観こそであったと考えるのは、はたして穿ちすぎであろうか。しかも景観の差異をもたらしたのは、屋敷地の大小・密度や建築部

材の優劣ばかりではなかったのではなかろうか。すくなくも、大量の遺物を伴出する城下の錯綜して稠密な遺構群は、他の宿場や村落の遺跡ではみることができないのである。また、城下では地点によって遺構や遺物にはなほだしい偏差が認められることがままある。機能別の空間の細分と統合が、大は都市域全体から小は個別の屋敷地にまで、及んでいると思われるのである。個々の遺構の性格や機能、さらにはそれらによって構成される空間のもつ意味が問われねばならない所以が、ここにある。

地下室や塵穴など、そうした検討はすでに始められつつあるが、全体としての分析はこれからの仕事というべきか。そして、その先に浮かび上がる都市像や村落像はどのようなのであろうか。両者の落差としての「贅沢」は、本質的には、物に則して語られることになるのか、それとも遺構に基づく空間構成に則して語られることになるのか。いずれにせよ、課せられた責務は大きいのである。

☆

よく指摘されることではあるが、考古学 110 余年の歴史のなかで、近世を対象とする調査・研究は日も浅く、もっとも若い分野である。1985年に刊行を開始した『岩波講座 日本考古学』全9巻（現在、再刊中）でさえ、未だ近世は独立した一項として取り上げられるにいたっていない。もとより編集者の関心の所在によるところ大ではあるが、しかしそれ以上に、近世考古学研究の立ち遅れがそうした事態を招いた理由であることも、否めない事実であろう。70年代の後半以降、調査事例が急速に増加するにもかかわらず、研究の基礎となる報告書の刊行がこの時点ではなお数少なかったことに象徴される如くにである。

本県の場合も、決して例外ではない。70年代までは、名古屋城、岡崎城、吉田城などの城跡における小規模な調査や、瀬戸の窯業生産遺跡が発掘調査の対象とされていたにすぎないのである。近世遺跡を埋蔵文化財として認識し、その積極的な記録化を始めたのは、むしろさらに遅れて80年代に入ってからのものであり、81年

の勝川遺跡（春日井市）の発掘調査をもって嚆矢としてよいだろう。以後、82年、旧紫川遺跡（名古屋市）、朝日西遺跡（西春日井郡清洲町）、83年、堅三蔵通遺跡・幅下小学校遺跡（名古屋市）、清洲城下町遺跡（清洲町）、85年、白川公園遺跡・正木町遺跡（名古屋市）、87年、名古屋城三の丸遺跡（名古屋市）と、次々と重要な遺跡が発見され、調査されることとなったのである。遺跡の性格も、尾張藩の城下町や勝川宿・清洲宿などの宿場町、あるいは朝日村などの村落と様々である。このような状況のなかで、窯業生産遺跡についても、87～89年には藤澤良祐氏が『本業焼の研究』（『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅶ～Ⅷ』）によって集大成を試みられるとともに、84年には尾呂遺跡（瀬戸市）の発掘調査もおこなわれている。

だが、近世遺跡の保護・研究条件が整ったとは、残念ながらいいがたい。依然として正報告書の刊行は少なく、また遺跡としての広がりをもどのように認定するかについても未解決の問題は多い。今日発掘調査されている遺跡は、その遺跡の有する近世以前の遺構の性格によって埋蔵文化財としての範囲が決められている場合が大半であり、近世遺跡としての小宇宙——例えば城下町や宿や村といった地域からみたとき、主要な区域が欠落してしまっているのである。このため、貴重な近世遺跡が、何ら記録にとどめられることなく、日々破壊され滅失しつつあるのが現状であろう。ある意味で、保護の手立てが最も遅れ、壊滅の危機に瀕しているのが近世遺跡であるともいえるのである。

では、どこに活路が見いだせるのか。近世という時代を研究の対象とする学問は、歴史も古く、分野も幅広い。一見、考古学という方法論を抜きにしても、十全な歴史像の再構成は可能であるかのような様相を呈している。それだけに、近世考古学の「学」としての自立こそが、今、問われているのであろう。そして、「学」として自立しうる道は、確かにある。誰よりも考古学は、老女の「贅沢」観を解明しうる鍵＝資料をしっかりとその手に握っているのだから。

（遠藤才文）

遺跡紹介

名古屋城三の丸遺跡

名古屋

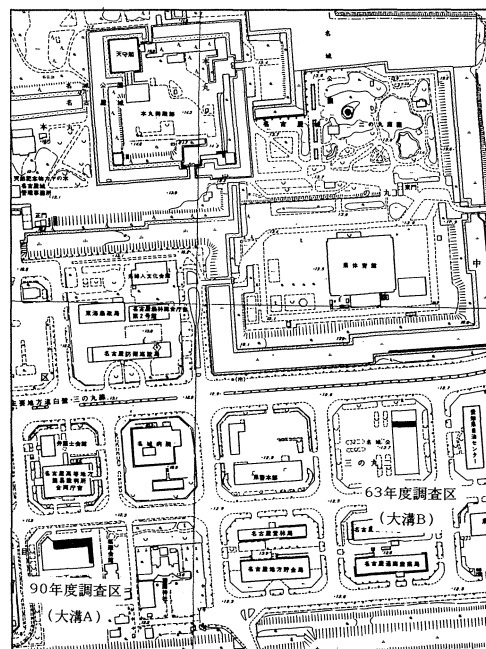
名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区に所在する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。名称の示す通り、近世には尾張藩重臣の武家屋敷が建ち並ぶ城の一郭であり、外堀に囲まれた敷地は、約68万㎡にも及ぶ広大なものである。当センターでは、平成2年10月から6ヶ月にわたり、名古屋家庭・簡易裁判所建設予定地約2800㎡を対象に発掘調査を実施した。ここでは、近世武家屋敷に伴う数多くの遺構、遺物が確認され、武士の生活様式や屋敷地の構造解明に新たな資料を追加することとなった。しかし、今回の調査で注目されるのは、名古屋城築城直前、16世紀代に属する城の堀とみられる大溝が確認された点である。というのは、当時、この近辺には今川氏により築かれた「那古野城」の存在が知られており、昭和63年、当センターの調査で堀に比定し得る大溝が確認され、その実在が初めて明らかになったという経緯があるからである。そこで、2ヶ所で確認された当該期の大溝を中心に、名古屋城築城前夜の様相を探っていきたい。

まず、2本の大溝の規模から見てゆくと、今年度確認された大溝（大溝A）が、幅13m深さ5m、長さは調査区の北・東辺を沿う形で約75m、昭和63年の大溝（大溝B）は幅5～6.5m、深さ3mを測る。断面形状は、大溝Aが箱状、大溝Bは、当初薬研状だったものを、箱状に改削している。溝の方向は、若干角度差はあるものの、ともに東西方向を基本としており、大溝Aは調査区内で直角に南へ屈曲し、さらに、その両端はそれぞれ北と東へ屈曲する可能性が強い。また、遺物は、大溝A、Bとも16世紀中頃を中心とした陶磁器類が出土しているが、量的には大溝BがAを大きく凌いでいる。

以上が2本の大溝の概略であるが、出土遺物を見る限り、これらの溝と1522（大永2）年頃築かれ、1582年（天正10）年頃廃城になったという那古野城との間に年代的に大きな齟齬は生

じない。しかし、江戸時代の『金城温古録』によれば、那古野城は現在の二の丸を中心とする周辺を城域としており、近接する大溝Bはともかく、二の丸から約500m離れた大溝Aを那古野城の堀と結論するには、現段階ではあまりに資料が不足しているといわざるを得ない。しかし、敢えて那古野城の堀と仮定した上で可能性を指摘するならば、この大溝Aの出現は、築城当初と考えるより1534（天文2）年の織田信秀の那古野城入城や、1584（天昌12）年の小牧・長久手の戦い等に際しての城域拡大や再利用に伴うものと考えた方がより妥当であろう。このことは、大溝Bが一度改削を受けていることから推察できるのであるが、やはり確証があるわけではなく、あくまで推定の域を出ないものである。いずれにせよ、2つの城が相前後してこの地に造営されたことは、この名古屋台地北西端が自然の要害として、城の立地に適していたことを雄弁に物語るものであろう。今後、出土遺物や他の同時期遺構の検討はもちろん、周辺の調査や他城館との比較検討を進めることにより、城下町を含めた構造がより明らかになってくよう。

（金子健一）



遺構配置図 (1:10,000)

愛知県埋蔵文化財担当専門職員名簿 (平成3年6月1日現在)

県市町 村 名	所 属	電 話	
		職 名	氏 名
愛知県	教育委員会文化財課	<052> 961-2111	
		専門員	赤羽一郎
		教育主事	梅本博志
		"	磯谷和明
		<0567> 67-4164	
	埋蔵文化財調査センター	所長	伊藤稔
		主査	中川真文
	陶磁資料館	<0561> 84-7474	
		学芸課長	柴垣勇夫
		主任学芸員	浅田員由
		"	仲野泰裕
		"	井上喜久男
		学芸員	野末浩之
名古屋市	教育委員会文化課	<052> 972-3268	
		学芸員	小島一夫
		"	山田敏一
瀬戸市	教育委員会文化財課	<0561> 21-1951	
	調査係長	藤澤良祐	
	主事	服部郁	
	"	山下峰司	
	"	加藤大蔵	
	"	服部文孝	
	"	水野亜紀子	
	嘱託	松澤和人	
	"	大蔵順子	
春日井市	教育委員会民俗考古調査室	<0568> 33-1111	
	専門員	大下武	
	嘱託	永井宏幸	
	"	梅田純代	
小牧市	教育委員会社会教育課	<0568> 72-2101	
	主査	中嶋隆	
	主事補	坪井裕司	
稲沢市	教育委員会社会教育課	<0587> 32-1111	
	主事	北條猷示	
	書記	日野幸治	
東海市	教育委員会社会教育課	<052> 603-2211	
	主査	立松彰	
岡崎市	教育委員会市史編纂事務局	<0564> 23-6439	
	嘱託	川崎みどり	
	"	伊藤久美子	
安城市	教育委員会文化財課	<0566> 76-1111	
	学芸員	岡安雅彦	
	"	天野信治	
	"	斉藤弘之	
西尾市	教育委員会社会教育課	<0563> 56-7722	
	主査	松井直樹	
豊田市	教育委員会社会教育課	<0565> 31-1212	
	副主幹	田端勉	
	主査	伊藤達也	
	主事	森泰通	
	書記	杉浦裕幸	
豊川市	教育委員会社会教育課	<05338> 5-2111	
	主事	前田清彦	
新城市	教育委員会社会教育課	<05362> 3-1111	
	書記	鈴木隆司	
師勝町	教育委員会社会教育課	<0568> 23-6111	
	主事	市橋芳則	
吉良町	教育委員会社会教育課	<0563> 32-1111	
	主査	荻野栄	
一宮町	教育委員会教育課	<05339> 3-3111	
		主事	須川勝以
		<05337> 8-4577	
		主事	鈴木徹
		<05312> 2-1151	
	教育委員会	学芸員	増山禎之
		<052> 823-3200	
		学芸員	野口泰子
		"	平出紀男
		"	木村有作
		"	川合剛
		"	水野裕之
		"	伊藤正人
		"	服部哲也
		"	竹内宇哲
		"	伊藤厚史
		"	尾野善裕
一宮市	一宮市博物館	<0586> 46-3215	
	学芸員	土本典生	
	"	田中禎子	
尾西市	尾西市歴史民俗資料館	<0586> 62-9711	
	学芸員	伊藤和彦	
半田市	半田市立博物館	<0569> 23-7173	
	館長	立松宏	
	学芸員	近藤英正	
常滑市	常滑市民俗資料館	<05693> 4-5290	
	学芸員	中野晴久	
知立市	知立市歴史民俗資料館	<0566> 83-1133	
	学芸員	岡本茂史	
豊橋市	豊橋市美術博物館	<0532> 51-2621	
	主事	賛元洋彦	
	"	小林久彦	
	"	岩瀬彰利	
	主事補	赤木剛	
蒲郡市	蒲郡市博物館	<0533> 68-1881	
	学芸員主査	小笠原久和	
弥富町	弥富町歴史民俗資料館	<0567> 65-4355	
	学芸員	伊藤隆彦	
清洲町	清洲貝殻山貝塚資料館	<052> 409-1467	
	学芸員	野口哲也	
三好町	三好町歴史民俗資料館	<05613> 4-5000	
	館長補佐	安田幸市	
美和町	美和町歴史民俗資料館	<052> 442-8522	
	学芸員	鎌倉崇志	
武豊町	武豊町歴史民俗資料館	<0569> 73-4100	
	学芸員補	奥川弘成	
設楽町	設楽町立奥三河郷土館	<05366> 2-1440	
	館長	鈴木富美夫	
足助町	足助資料館	<0565> 62-0387	
	館長	鈴木茂夫	
	主事	鈴木昭彦	

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 職員名簿一覧

役員			保存科学	江本 義理	東京国立文化財研究所
理事長	高 木 鐘 三				名誉研究員
常務理事	鈴 木 正 明		岩石学	諏訪 兼位	名古屋大学教授
理事			木材組織学	木方 洋二	名古屋大学教授
小 金 潔	県教育長		職員		
井 関 弘太郎	中部大学教授		事務局長(兼管理課長)	川 島 一 夫	
伊 藤 秋 男	南山大学教授		管理課		
大 参 義 一	愛知学院大学教授		主 査	谷 隆 盛	
坪 井 清 足	(財)大阪文化財センター理事長		主 事	伊 藤 秀 城	後 藤 捨 成
植 崎 彰 一	名古屋学院大学教授			村 上 寿 章	伊 藤 晴 美
稲 石 新	都市教育長協議会会長 (蒲郡市教育長)		調査課		
大 溪 紀 雄	町村教育長協議会会長 (吉良町教育長)		課 長	加 藤 安 信	
石 井 晃 一	県土木部長		課長補佐(兼主査)	森 勇 一	
樋 口 康 則	県教育委員会社会教育部長		主 査	大 橋 正 明	鷲 見 豊
武 田 晋	県清洲貝殻山貝塚資料館館長 (清洲町長)			小 塚 俊 夫	城ヶ谷 和 広
亀 井 誠 治	県陶磁資料館館長		調査研究員	野 本 欽 也	遠 藤 才 文
監 事				小 澤 一 弘	松 原 隆 治
磯 貝 満 洲	県出納事務局次長			太 田 芳 弘	都 築 暢 也
倉 知 昌 視	県教育委員会総務課長			赤 塚 次 郎	石 黒 立 人
専 門 委 員				宮 腰 健 司	酒 井 俊 彦
考 古 学	植崎 彰一	名古屋学院大学教授		池 本 正 明	余 合 昭 彦
文 献 史 学	早川 庄八	名古屋大学教授		服 部 信 博	川 井 啓 介
地 理 学	海津 正倫	名古屋大学助教授		小 島 廣 也	服 部 俊 之
建 築 史 学	浅野 清	愛知工業大学客員教授		鈴 木 正 貴	蟹 江 吉 弘
動・植物・考古学	渡辺 誠	名古屋大学教授	嘱託員	樋 上 昇	
形質人類学	池田 次郎	九州国際大学教授		松 田 訓	岡 本 直 久
				金 子 健 一	樋 真 美子

(平成3年6月1日現在)

セ ン タ ー 日 誌

役員の変動

理事長辞任 3月31日 松川 誠次
理事辞任 “ 鈴木 隆俊

職員の変動

古 田 伴 弘 県教育委員会管理課へ
福 岡 晃 彦 愛知県立東浦高等学校へ
日 比 幸 稲沢市立稲沢東小学校へ
安 井 俊 則 小坂井町立小坂井西小学校へ
真 鍋 雅 治 愛知県立松蔭高等学校へ
北 村 和 宏 愛知県立岡崎西高等学校へ

加 藤 とよ江 退職

伊 藤 隆 彦 弥富町教育委員会社会教育課へ

埋蔵文化財愛知 No. 25

発行日 平成3年7月1日
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
発行 〒498 愛知県海部郡弥富町
大字前ヶ須新田字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 有限会社 水野商会